

平安京の変質

はじめに

延暦一二年（七九三）正月二五日、桓武天皇は大納言藤原小黒麻呂・左大弁紀古佐美らを山背国葛野郡宇太へと派遣している^①。これは遷都のためであり、平城京より長岡京へと遷都したのが延暦三年（七八四）^②であることを考えると、僅か一〇年後のことであった。そしてその後、新京への遷都は順調に行われ、翌延暦一三年（七九四）一〇月二八日には「遷都詔曰。〈云々〉。葛野（乃）大宮地者、山川（毛）麗（久）四方国（乃）百姓（毛）参出来事（毛）便（之）氏（云々）」という遷都の詔が出され^③、更に翌月の十一月八日には「山背」の国名表記が新たに「山城」と改められ、新京の名も「平安京」と定められている^④。

この桓武天皇によって新たに造られた都については、『延喜式』卷四十二左右京職式京程条に規模が規定されており、「南北一千七百五十三丈」「東西一千五百八丈」という規模であった。

牧 伸 行

そして、京内は碁盤の目状に縦横に大路・小路で区画されており、中央を「廣廿八丈」の朱雀大路が南北に走り、朱雀大路の東半分が左京、西半分が右京であった。朱雀大路に沿っては、七条通と七条坊門の間に東西の鴻臚館が設けられて外国使節の迎接が行われていた。さらに、羅城門を挟んで東西に東寺と西寺が建立されている。また、東西の堀川に接して東市と西市が置かれるなど、例外的な施設は存在するが平面的には左右対称に都市設計がなされていた。

このように左右対称に造営された平安京ではあるが、右京と左京ではその後の発展については大きな差が生じて、左京が隆盛を極めるのに対して右京は衰退していくことになる。その結果、中世以降になると同じ平安京内に位置するにもかかわらず、洛中と洛外というように区分されるようになってしまう。その右京が衰退していく要因が何であるのかについて考察を加えない。

一 「池亭記」にみえる右京の衰退

平安京の左右両京については、古くから左京に比べて右京の衰退が早かったことが指摘されているが、それについては慶滋保胤の「池亭記」による記述が有名である。

慶滋保胤は平安時代中期の文人貴族として有名な人物である。賀茂氏出身であり、父は陰陽家として有名な賀茂忠行であるが、家業である陰陽道を継ぐことなく、文章生として大学寮に学び、菅原文時に師事して官人として出身をしている。また、仏教についても造詣が深かったようであり、康保元年（九六四）に創始された勧学会ではその中心人物となっており、さらに寛和二年（九八六）には出家し法名を心覚、さらに寂心と名乗った。浄土信仰に傾倒しており、著作には『日本往生極楽記』などがある。

さて、「池亭記」はこの慶滋保胤が天元五年（九八二）一〇月に著したものである。そこには自らの邸宅と平安京に関する内容が記されているが、あくまでも文学作品であるという前提を必要とする。その内容については全体を六段に分けて考えることができ、それぞれ段ごとに原文と読み下しを以下に記し、簡単に解説を加えたい。⁽⁶⁾

〈第一段〉

予二十余年以来、歴^二見東西二京^一、西京人家漸稀、殆^二幾^一幽墟^二一矣。人者有^レ去無^レ来、屋者有^レ壊無^レ造。其無^レ処^二移徙^一、無^レ憚^二賤貧^一者是居。或樂^二幽隱亡命^一、当^二入^レ山帰^一田者不^レ去。若^下自蓄^二財貨^一、有^レ心^二奔營^一者、雖^二一日^一不^レ得^レ住之。往年有^二東閣^一。華堂朱戸、竹樹泉石、誠是象外之勝地也。主人有^レ事左転、屋舍有^レ火自燒。其門客之居^二近地^一者数十家、相率而去。其後主人雖^レ帰、而不^二重修^一。子孫雖^レ多、而不^二永住^一。荊棘鎖^レ門、狐狸安^レ穴。夫如^レ此者、天之亡^二西京^一、非^二人之罪^一明也。

予二十余年以来、東西二京を歴見するに、西京は人家漸く稀にして、殆幽墟に幾し。人は去ること有りて来ることなし、屋は壊ること有りて造ることなし。その移徙するに処なく、賤貧を憚ることなき者はこれ居り。あるいは幽隱亡命を樂しみ、まさに山に入り田に帰るべき者は去らず。自ら財貨を蓄へ、奔營に心有るが若き者は、一日といへども住むことを得ず。往年一つの東閣有り。華堂朱戸、竹樹泉石、誠にこれ象外の勝地なり。主人事有りて左転せられ、屋舍火有りて自づから焼けぬ。その門客の近地に居る者数十家、相率ゐて去りぬ。その後主人帰るといへども、重ねて修はず。子孫多しといへども、

永く住まはず。荊棘門を鎖し、狐狸穴に安んず。それかくの如きは、天の西京を亡ぼすなり、人の罪に非ざることを明らかなり。

《第二段》

東京四条以北、乾良二方、人人無^二貴賤^一、多所^二群聚^一也。高家比^レ門連^レ堂、小屋隔^レ壁接^レ簷。東隣有^二火災^一、西隣不^レ免^二余炎^一、南宅有^二盜賊^一、北宅難^レ避^二流失^一。南阮貧、北阮富、富者未^二必有^レ德、貧者亦猶有^レ恥。又近^二勢家^一容^二微身^一者、屋雖^レ破不^レ得^レ葺、垣雖^レ壞不^レ得^レ築。有^レ樂不^レ能^二大開^レ口而咲^一、有^レ哀不^レ能^二高揚^レ声而哭^一。進退有^レ懼、心神不^レ安。譬猶^三鳥雀之近^二鷹鷂^一矣。何況^二軫^レ廣^二門戶^一、初置^二第宅^一。小屋相并、小人相訴者多矣。宛如^二子孫去^二父母之國^一、仙官謫^中人世之塵^上。其尤甚者、或至^下以^二狹土^一滅^中一家愚民^上。或卜^二東河之畔^一、若遇^二大水^一、与^二魚鼈^一為^レ伍、或住^二北野之中^一、若有^二苦旱^一、雖^二渴乏^一無^レ水。彼兩京之中、無^二空閑之地^一歟。何其人心之強甚乎。

東京の四条以北、乾良の二方は、人人貴賤となく、多く群聚する所なり。高家は門を比べ堂をつね、小屋は壁を隔て簷を接ふ。東隣に火災有れば、西隣は余炎を免れず、南宅に盜賊有れば、北宅は流失を避り難し。南阮は貧し

く、北阮は富めり、富める者はいまだ必ずしも徳有らず、貧しき者はまたなほ恥有り。また勢家に近くして微身を容るる者は、屋破れたりといへども葺くことを得ず、垣壞れたりといへども築くことを得ず。樂しみ有れども大きに口を開きて咲ふこと能はず、哀しみ有れども高く声を揚げて哭くこと能はず。進退懼有り、心神安からず。譬へばなほ鳥雀の鷹鷂に近づぐがごとし。何ぞいはんや軫門戸を広くして初めて第宅を置くをや。小屋相并せ、小人相訴ふる者多し。宛も子孫の父母の國を去り、仙官の人世の塵に謫せらるるが如し。その尤も甚だしきは、あるいは狹き土を以て一家の愚民を滅ぼすに至る。あるいは東河の畔に卜して、若し大水に遇へば、魚鼈と伍たり、あるいは北野の中に住して、若し苦旱有れば、渴乏すといへども水なし。かの兩京の中、空閑の地なきか。何ぞその人心の強きこと甚だしきや。

《第三段》

且夫河辺野外、非^二畜比^一屋比^レ戸、兼復為^レ田為^レ畠。老圃永得^レ地以開^レ畝、老農便堰^レ河以溉^レ田。比年有^レ水、流溢隄絶。防河之官、昨日称^二其功^一、今日任^二其破^一。洛陽城人、殆可^レ為^レ魚鼈。竊見^二格文^一、鴨河西、唯免^レ耕^二崇親院

田^一、自余皆悉禁斷。以^レ有^二水害^一也。加以東河北野、四郊之二也。天子迎^レ時之場、遊幸之地也。有^レ人縱欲^レ耕、有司何不^レ禁不^レ制乎。若謂^二庶人之遊戲^一者、夏天納涼之客、已無^下漁^二小鮎^一之涯^上、秋風遊獵之士、又無^下臂^二小鷹^一之野^上。夫京外時爭住、京内日陵遲。彼坊城南面、荒蕪眇々、秀麥離々。去^二膏腴^一就^二墮塙^一、是天之令^レ然歟、將人之自狂歟。

またそれ河辺野外、たた屋を比べ戸を比べたるのみに非ず、兼ねてまた田と為し畠と為す。老圃は永く地を得て以て畝を開き、老農は便ち河を堰きて以て田に溉す。比年水有り、流溢れて隄絶えぬ。防河の官、昨日その功を称され、今日はその破に任す。洛陽城の人、殆魚と為るべきか。竊かに格文を見るに、鴨河の西は、ただ崇親院の田を耕すことのみを免し、自余は皆悉く禁斷す。水害有るを以てなり。しかのみならず、東河北野は四郊の二つなり。天子の時を迎へたまふ場、遊幸の地なり。人有りて縦ひ居らんと欲ひ耕さんと欲ふとも、有司何ぞ禁ぜず制せざらんや。若し庶人の遊戲を謂はば、夏天納涼の客、已に小鮎を漁る涯なく、秋風遊獵の士、また小鷹を臂にする野なし。それ京外は時に争ひ住み、京内は日に陵遲す。かの坊城の南面は、荒蕪眇々として、秀麥離々

〈第四段〉

たり。膏腴を去りて墮塙に就く、これ天の然らしむるか、はた人の自ら狂へるか。

予本無^二居処^一、寄^二居上東門之人家^一。常思^二損益^一、不^レ要^二永住^一。縱求不^レ可^レ得之。其価直^二三畝千万錢乎^一。予六条以北、初卜^二荒地^一、築^二四垣^一開^二一門^一。上扨^二蕭相国窮僻之地^一、下慕^二仲長統清曠之居^一。地方都廬十有余畝。就^レ隆為^二小山^一、遇^レ窪穿^二小池^一。池西置^二小堂^一安^二弥陀^一。池東開^二小閣^一納^二書籍^一。池北起^二低屋^一着^二妻子^一。凡屋舍十之四、池水九之三、菜園八之二、芹田七之一。其外緑松島、白沙汀、紅鯉白鷺、小橋小船、平生所^レ好、尽在^二於中^一。況乎春有^二東岸之柳^一、細煙嫋娜。夏有^二北戸之竹^一、清風颯然。秋有^二西窓之月^一、可^二以披^レ書。冬有^二南簷之日^一、可^二以炙^レ背。

予本より居処なく、上東門の人家に寄居す。常に損益を思ひ、永住を要めず。縦ひ求むとも得べからず。その価直^二三畝千万錢ならんか^一。予六条以北に初めて荒地を卜し、四つの垣を築きて一つの門を開く。上は蕭相国の窮僻の地を扨び、下は仲長統の清曠の居を慕ふ。地方都廬十有余畝。隆に就きては小山を為り、窪に遇ひては小池

を穿る。池の西に小堂を置きて弥陀を安す。池の東に小閣を開きて書籍を納む。池の北に低屋を起てて妻子を着けり。凡そ屋舎は十の四、池水は九の三、菜園は八の二、芹田は七の一なり。その外緑松の島、白沙の汀、紅鯉白鷺、小橋小船、平生好む所、尽く中に在り。いはんや春は東岸の柳有り、細煙嫋娜たり。夏は北戸の竹有り、清風颯然たり。秋は西窓の月有り、以て書を披くべし。冬は南簷の日有り、以て背を炙るべし。

《第五段》

予行年漸垂五旬、適有小宅。蜗安其舍、虱樂其縫。鵲住小枝、不望鄧林之大、蛙在曲井、不知滄海之寬。家主、職雖在柱下、心如住山中。官爵者任運命、天之工均矣。寿夭者付乾坤、丘之禱久焉。不樂人之為風鵬、不樂人之為霧豹、不樂要屈膝折腰、而求媚於王侯將相、又不樂要避言避色、而刊蹤於深山幽谷。在朝身暫隨王事、在家心永歸仙那。予出有青草之袍、位雖卑職尚貴、入有白紵之被、暄於春、潔於雪。盥漱之初、參西堂、念弥陀、誦法華。飯後之後、入東閣、開書卷、逢古賢。夫漢文皇帝為累代之主、以下好儉約安人民也。唐白樂天

為異代之師、以下長詩句一歸中仏法上也。晋朝七賢為異代之友、以一身在朝志在隱也。予遇賢主、遇賢師、遇賢友。一日有三遇、一生為三樂。近代人世之事、無一可戀。人之為師者、先貴先富、不以文次。不無無師。人之為友者、先勢以利、不以淡交。不無無友。予杜門閉戸、独吟独詠。若有余興者、与兒童一乘小船、叩舷鼓棹。若有余假者、呼僮僕入後園、以糞以灌。我愛吾宅、不知其他。予行年漸垂五旬に垂として、適小宅有り。鵲はその舍に安んじ、虱はその縫に樂しむ。鵲は小枝に住みて、鄧林の大きなるを望まず、蛙は曲井に在りて、滄海の寬きことを知らず。家主、職は柱下に在りといへども、心は山中に住むが如し。官爵は運命に任ず、天の工均し。寿夭は乾坤に付く、丘の禱ること久し。人の風鵬たるを樂はず、人の霧豹たるを樂はず、膝を屈し腰を折りて、媚を王侯將相に求めんことを要はず、また言を避り色を避りて、蹤を深山幽谷に刊まんことを要はず。朝に在りては身暫く王事に隨ひ、家に在りては心永く仙那に歸す。予出でては青草の袍有り、位卑しといへども職なほ貴し、入りては白紵の被有り、春よりも暄く雪よりも潔し。盥漱の初、西堂に參り、弥陀を念じ、法華を読む。飯後の

後、東閣に入り、書卷を開き、古賢に逢ふ。それ漢の文皇帝は累代の主たり、儉約を好みて人民を安んずるを以てなり。唐の白楽天は異代の師たり、詩句に長じて仏法に帰するを以てなり。晋朝の七賢は異代の友たり、身は朝に在りて志は隱に在るを以てなり。予賢主に遇ひ、賢師に遇ひ、賢友に遇ふ。一日に三遇有り、一生三楽を為す。近代人の世の事、一つとして恋ふべきことなし。人の師たるは、貴きを先にし富めるを先にして、文を以て次とせず。師なきに如かず。人の友たるは、勢を以てし利を以てし、淡を以て交らず。友なきに如かず。予門を杜し戸を閉ぢて、独り吟じ独り詠ず。若し余興有れば、兒童と小船に乗り、舷を叩き棹を敲す。若し余暇有れば、僮僕を呼びて後園に入り、以は糞し以は灌く。我吾が宅を愛し、その他を知らず。

第六段

応和以来、世人好起「豊屋峻宇」、殆至「山節藻」税。其費且「巨千万」、其住纔「二三年」。古人云、造者不「居」。誠哉斯言。予及「暮齒」、開「起小宅」。取「諸身」量「于分」、誠奢盛也。上畏「于天」、下愧「于人」。亦猶「行人」之造「旅宿」、老蚕之成「独繭」矣。其住幾時乎。嗟乎、聖賢之造「家」也、不

「費」民、不「勞」鬼。以「仁義」為「棟梁」、以「礼法」為「柱礎」、以「道德」為「門戶」、以「慈愛」為「垣牆」、以「好儉」為「家事」、以「積善」為「家資」。居「其中」者、火不「能」燒、風不「能」倒、妖不「得」呈、災不「得」來、鬼神不「可」窺、盜賊不「可」犯。其家自富、其主是寿。官位永保、子孫相承。可「不」慎乎。天元五載孟冬十月、家主保胤、自作自書。

応和より以来、世人好みて豊屋峻宇を起て殆節を山に税に藻くに至る。その費は巨千万に且とし、その住むこと纔かに二三年なり。古人云く、「造れる者は居らず」といへり。誠なるかなこの言。予暮齒に及びて、小宅を開き起つ。これを身に取り分に量るに、誠に奢盛なり。上は天を畏れ、下は人に愧づ。またなほ行人の旅宿を造り、老蚕の独繭を成すがごとし。その住まふこと幾時ぞ。ああ、聖賢の家を造る、民を費さず、鬼を勞せず。仁義を以て棟梁と為し、礼法を以て柱礎と為し、道德を以て門戸と為し、慈愛を以て垣牆と為し、好儉を以て家事と為し、積善を以て家資と為す。その中に居る者は、火も焼くこと能はず、風も倒すこと能はず、妖も呈ることを得ず、災も来ることを得ず、鬼神も窺ふべからず、盜賊も犯すべからず。その家自づから富み、その主はこれ寿し。官位永く保ち、子孫相承く。慎まざるべけんや。

天元五載孟冬十月、家主保胤、自ら作り自ら書けり。

まず第一段では、西京（右京）の荒廃について述べている。

保胤自身が約二〇年間にわたり東西両京の様子を見続けてきた結果、西京においては人家は稀になって、ほとんど幽墟のようになっていて、人が去ることはあっても、移住してくることはなく、家屋も壊れるままで放置されている。世間を逃れ避けてひっそりと隠れ住んだり、官職を辞めて農業に従事する者は居続けているが、財貨を蓄えて、仕事熱心な者は一日といえども住むことはない。さらに、往年には一つの東閣があつたが、主人の失脚により、屋舎が焼けても修理されることはなく、その子孫でさえ住むことはなく、荒廃に任せた結果、狐狸の住居となってしまうている、と述べる。最後に、これは天によつて西京が減ぼされようとしてるのであり、人の罪ではないと締め括っている。

次に第二段においては、第一段を受け、西京の衰退に対する東京（左京）の殷賑を述べる。特に四条以北の乾（北西）と艮（東北）の二つの方角に人家が集中している様子が述べられ、権勢のある家が広大な邸宅を構えるのに対して、貧者は軒を接して集住していることを様々な例を挙げて述べている。そして、富者が貧者の土地を脅かしていることが記されている。

そして第三段で、鴨川べりや北野など、住民の都の東北部へ

の移住に関する状況を概観しており、特に鴨川の西地域における田畑の耕作について格文、すなわち『類聚三代格』所収の太政官符を参考として、本来崇親院にのみ耕作が許されているのみであるにもかかわらず、耕作が行われており水害の原因となっていることを嘆いている。

第四段で自らの池亭の構造と景観を述べる。地価の高騰により四条辺りではなく、六条以北に方一〇余畝の荒地を購入し、築山を造り池を掘り、池の西に阿弥陀堂を造り、東に書庫を、北に住居をそれぞれ配置している様子を記している。

また、第五段で作者自身の生活態度を自ら語り、最後に第六段では理想の住居論が書かれて締め括られている。特に第六段で「応和より以来、世人好みて豊屋峻宇を起て殆節を山にし税に藻くに至る」として、応和年間（九六一―九六四年）を一つの画期とみている。

この中で平安京の右京に付いて重要な変化が記されているのが第一段であるが、作者である保胤が「二十余年以来、東西二京を歴見」した総論的な内容として記している。そこには、「西京は人家漸く稀にして、殆幽墟に幾し。人は去ること有りて来ることなし、屋は壊ること有りて造ることなし」と左京の衰亡の様子が述べられている。そしてその要因の一つとして、「往年一つの東閣有り。華堂朱戸、竹樹泉石、誠にこれ象外の勝地

なり。主人事有りて左転せられ、屋舎火有りて自づから焼けぬ。その門客の近地に居る者数十家、相率ゐて去りぬ。その後主人帰るといへども、重ねて修はず。子孫多しといへども、永く住まはず。荆棘門を鎖し、狐狸穴に安んず」と、敢えて名を記さないままに「主人」とある人物の没落による例が挙げられている。

ここにみえる「主人」とは源高明のことであり、『日本紀略』後篇五安和二年（九六九）三月二五日条に、

廿五日壬寅。以_三左大臣兼左近衛大将源高明_一。為_三大宰員外帥_一。以_三右大臣藤原師尹_一為_三左大臣_一。以_三大納言同在衡為_三右大臣_一。左馬助源満仲。前武藏介藤原善時等。密告_三中務少輔源連。橘繁延等謀反由_一。仍右大臣以下諸卿忽以_三參入。被_レ行_三諸陣三寮警固々関等事_一。令_下參議文範_一。遣_中密告文於太政大臣職曹司_上。諸門禁_三出入_一。檢非違使捕_三進前相模介藤原千晴。男久頼。及隨兵等_一禁獄。又召_三内記_一有_三勅符木契等事_一。禁中騒動。殆如_三天慶之大乱_一。

とあり、いわゆる安和の変に連坐して大宰権帥に左遷されている。そして、同書安和二年四月一日条には「午刻。員外帥西宮家焼亡。所_レ殘雜舍両_三也_一とみえ、左遷直後に高明邸が焼亡している。その後、天禄三年（九七二）四月二〇日条には、

廿日己酉。賀茂祭。今日。大宰権帥源朝臣高明自_三大宰府_一

上洛。著_三葛野別屋_一。

と、高明は大宰府より都へ戻ったようであるが、西京の邸宅には戻らず「葛野別屋」に入っている。この『日本紀略』にみえる高明に関する一連の記事は、「池亭記」の内容と合致し、保胤は事実に基づいて記述していると思われる。なお、付け加えるならば同じように第三段の「崇親院」に関する記述についても『類聚三代格』卷八所収の昌泰四年（九〇一）四月五日付太政官符⁷⁾によるものであることが明らかであり、「竊かに格文を見」たという内容が事実であることがわかる。

このように「池亭記」には、事実に基づく内容が記されており、その内容に関しては信頼が置けるといえる。ただし、敢えて事実に基づく内容を記すことによって、自らの文章を真に迫るものであるという修飾を加えている可能性が指摘できるのではないだろうか。また、「池亭記」に敢えて「東西二京」の盛衰を記すのは、慶滋保胤が邸宅を左京すなわち東京に購入したというのもその理由の一つではないだろうか。四条以北の土地ではなく六条であったとしても、衰亡している西京ではなく東京であるということを強調するために第一段が記されている可能性もあるであろう。

二 東市と西市

先に見たように慶滋保胤は右京（西京）の衰退について「天の西京を亡ぼすなり、人の罪に非ざること明らかなり」と天意であることを指摘しているが、果たして天意と言い切れるのだろうか。

平安京では、左右両京のそれぞれ左京七条坊門南・七条北・大宮東・堀川西に東市が、右京七条坊門南・七条北・大宮西に西市が設けられている。この市は平安京に限らず平城京以来、左右京にはそれぞれ市、東市と西市が置かれていた。平城京の場合も京域の南方に東市・西市がそれぞれ置かれていたが、これについて藤原不比等が、豪族たちの経済活動が活発になるのを喜ばず、中国的な律令体制のもとで、豪族を官僚制の枠組みの中に閉じこめたいと考え、そのために経済と政治・行政の分離を形で示すために市の場所が設定されたという指摘がある⁽⁸⁾。しかしながら、これは物資を運搬する堀川、平城京の場合では佐保川と秋篠川の流路が重要であり、京の左右対称という考え方から、その二つの堀川が同じような場所を通る位置に設定されたことに起因すると考えられる。

「池亭記」においては明確に述べられていないが、東市と西市との違いが左京と右京の盛衰にも大いに関係しているものと考え

えられる。東市と西市は同時に売買が行われていた訳ではなく、『延喜式』巻四十二東西市司式集東西市条に、

凡毎月十五日以前集「東市」。十六日以後集「西市」。

とあり、毎月の前半の一五日までは東市で、一六日以降の後半には西市において交易が行われることになっていた。また、取り扱う品物についてもやはり『延喜式』の東西市司式の東廩条と西廩条に詳細が規定されており、廩数は異なるものの一応は公平を期すように設定されていた。

しかし、平安京の東西の市について興味深い記事が『続日本後紀』巻一二承和九年（八四二）一〇月庚辰（二〇日）条に見える。

庚辰。西市司言。依「承和二年九月符旨」。錦綾。絹。調布。糸。綿。紵。染物。縫衣。統麻。針。櫛。染革。帶幡。油。土器。絹冠。牛厘等類興「販於西市」。而東市司論云。檢「承和七年四月符」。依「弘仁十一年四月式」。件等色物。兩市共可「興販」。不「可」更度⁽⁹⁾。今百姓悉遷⁽¹⁰⁾於東⁽¹¹⁾。交「易」件物⁽¹²⁾。市廩既空。公事闕怠者。去承和二年彼此中折。施行既訖。而承和七年四月班⁽¹³⁾式之日。遺漏不⁽¹⁴⁾改。勅。宜⁽¹⁵⁾依「前格」。不⁽¹⁶⁾「據」⁽¹⁷⁾式。

この記事についてはすでに検討が加えられているが、それを参考に考察を加えてみると、内容的には西市司による訴えによつ

て式の無効が承認された内容となつてゐる。その訴えとは、承和二年（八三五）の太政官符によつて「錦綾。絹。調布。絲。綿。紵。染物。縫衣。紵。麻。針。櫛。染革。帶幡。油。土器。絹冠。牛厘等」といった種類の物品は本来西市において興販が行われるべきものであるという主張である。これに対して東市司は承和七年（八四〇）九月の太政官符をもとに、弘仁十一年（八二〇）四月の式によつて西市司の訴えている物品について両市で興販することになったことを主張している。ここで西市が挙げている承和二年九月太政官符については残念ながら伝わっておらず内容は不明であるが、各市の専売品に関する内容が記されていたのではないだろうか。そして、東市司のいう「檢承和七年四月符」。依「弘仁十一年四月式」とある弘仁十一年（八二〇）四月の式とは『弘仁式』のことであり、承和七年（八四〇）四月符は『類聚三代格』卷第一七「文書并印事」所収承和七年（八四〇）四月二三日太政官符である。以下にその全文を挙げると、

太政官符

頒行改正遺漏紵繆「格式」事

右^一檢「案内」。太政官去天長七年閏十二月七日下午^二諸司「符^一。太政官去十一月十七日符^一。被^二左近衛大將從三位兼守大納言清原真人夏野宣^一。奉^レ勅。律令之興。盖始^二大

宝^一。懲肅既具。勤誠亦甄。然律令之典。上^二掌^二大綱^一。至^二於^二體履相須^一事。猶闕如。論^二之^二政術^一。固有^レ未^レ周。因^レ茲修^二格式^一以備^二闕違^一。宜^下施^二之^二内外^一。尽使^中遵行^上者。若有^下与^二格式^一相^二紵繆^一及遺漏^上者。亦宜^二具錄申^一者。被^二中納言從三位兼行中務卿直世王宣^一。奉^レ勅。修撰之後。改張諸事。宜^三來年二月以前悉令^二申訖^一。紵繆遺漏等亦准^レ此。如有^二疎略及過^レ期者。依^レ法科^レ處。不^二曾寬宥^一者。今被^二右大臣宣^一。奉^レ勅。採^二拾新修^一。以^二補^二闕漏^一。討^二覈故實^一。以^二正^二紵繆^一。筆削功成。撰錄周備。宜^二早速施行^一。

承和七年四月廿三日

とある。ここにみえる「格式」は『弘仁格式』のことであり、『弘仁格式』には遺漏や紵繆が多く、天長七年（八三〇）に改正されたがそれでも不備があつたため、更に承和七年に「遺漏紵繆」を改正して頒行されたことを示している。すなわち、『弘仁式』において定められた物品について、西市司が異議を申し立てた結果、その訴えが認められて改めて承和二年太政官符に従つて西市の専売品となつたのである。

ただし、先に挙げた『延喜式』の東廩条と西廩条をみると、承和九年（八四二）に西市の専売となつた物のうち糸・紵・縫衣・針・櫛・染革・油の七種が東市でも取り扱われており、東

西両市の共通物品となっている。このことについてその詳細は不明とするしかないが、西市の専売とはなったものの東市においても需要があつたために済し崩し的に取り扱われるようになり、その結果が『延喜式』の規定へと反映されているのではないかと推測できる。

ところで、承和九年（八四二）一〇月庚辰（二〇日）条で注目されるのは東市が主張していることの中の「今百姓悉遷^二於東^一。交^二易件物^一。市塵既空。公事闕怠者」という部分である。これは承和九年段階の九世紀中頃には既に西市すなわち右京の住民が減少するという事態が生じていることを示しているといえよう。

では、何故早い段階で右京の衰退という現象が生じたのかを考えると、やはり地形的な要因が大きな影響を与えているといえる。

三 葛野川の治水と右京

平安京における自然災害等については、飢饉の発生や洪水対策、疫病の流行、地震などについて研究が行われている⁽¹²⁾。その中でも、平安京は東西を鴨川と葛野川（桂川）に挟まれた地に位置することから、その治水については遷都以来の一つの大き

な懸案事項であつた。そのため、遷都後比較的早い時期からその対策が行われていたようである。

平安京における洪水等に関する記録は六国史だけではなく、『日本紀略』やあるいは貴族の日記によつて伝えられており、左右京のいずれで被害が発生したかは明確でない場合が多いものの、台風・洪水の記録は延暦一三年（七九四）から嘉応二年（一一七〇）までの間に一〇四例残されている⁽¹³⁾。

朝廷による治水に関する例としては防鴨河所（使）と防葛野河所（使）が挙げられる。これについては『類聚三代格』巻第五「交替并解由事」所収天長八年（八三一）一二月九日付太政官符に次のようにみえる。

太政官符

応^三左右防城使并侍從厨防鴨河葛野河所五位以下別当四年遷替兼責^二解由^一事

右太政官去天長元年六月十九日下^二民部省^一符^三。參議左大弁從四位上直世應奏狀^三。侍從厨并防鴨河葛野河所五位以下別当等。永預^二其事^一。曾無^二交替^一。縱有^二欠損^一。何以拘留。稽^二之公途^一。理不^レ可^レ然。望請。自今以後、限^二三箇年^一更相遷替。付^二官物^一即責^二解由^一。伏聽^二天裁^一者。右大臣宣。奉^レ勅。依^レ奏者。今被^二大納言正三位兼行左近衛大將民部卿清原真人夏野宣^一。併。奉^レ勅。三年之歴從^レ事督促。宜

下自今以後以三四箇年^レ為中遷替期上。左右防城使同准^レ之。

天長八年十二月九日

これは、両所の長官である別当の任期を三年から四年へと改めた内容であるが、本文中に天長元年（八二四）段階でのこととして「防鴨河葛野両所」とあり、ともにその名称から明らかにように鴨川と葛野川の管理を担当する官であり、創設時期は不明ではあるものの遅くとも天長元年以前には両使が存在していたことが明らかとなる。そして、両所は貞観三年（八六一）三月には廃止され、山城国が鴨川と葛野川の管理に当たることになるが、「防鴨河所」はその後程なくして復活したようで、「防鴨河使」として鴨川の管理にあたることとなった。⁽¹⁵⁾

このことは、葛野川の治水に関しての朝廷の撤退を意味するものといえる。しかし、葛野川に関しては防葛野河所が設置される以前から治水に関する記録が五例残っている。初見は延暦十九年（八〇〇）一〇月に山城・大和などの国に対して一万人を徴発し、葛野川の堤を修理させたという記事である。⁽¹⁶⁾ 残る四例は平城朝に集中しているが、大同元年（八〇六）九月、大同二年（八〇七）十一月、大同三年（八〇八）六月および七月⁽¹⁷⁾である。それに対して鴨川の治水に関する記事は同時期にはみられず、平安時代初期には鴨川よりも葛野川に対する治水事業に朝廷が力を尽くしている様子がうかがえる。そして、その

後は先述の防鴨河所・防葛野河所の設置に至るのである。

ただし、防鴨河使だけが復活するのに対して防葛野河所がそのまま消滅してしまうという事実は否定できず、葛野川の治水に対する朝廷の関心が稀薄になったといえる。これは、当時の右京が衰退し始めている兆候であると考えられる。

それに加えて、地形的に右京は左京に比べて低湿地であったといわれているが、それ以外にも発掘調査によれば洪水の痕跡が確認されている。例えば西市に近接していた西堀川小路の場合、三条二坊では堀川は泥土層と砂礫層が交互に堆積し、上層の砂礫層は路面にまで達するなど、洪水で一気に埋め尽くされてしまった状況が確認でき、出土物から一〇世紀後半に埋もれて廃絶している。さらに、五条二坊ではやはり一〇世紀後半以後に西側に川が氾濫して川幅が広がっており、一一世紀後半には西堀川小路が墓地として利用されている。また、七条二坊における川の堆積は、幾層にも互層になって複雑に重なり合っており、川幅は二メートル以上で検出されるなど、度重なる氾濫の結果が見出されている。⁽²¹⁾ さらに、西堀川について、平安中期には土砂に埋まり、あふれ出た水が西堀川の二本西側の道祖大路に流れ込み、勘解由小路以南の道祖大路は道祖川に変貌し、平安後期には西堀川小路と道祖大路の間の野寺小路にも流路を形成し、野寺川になったことが確認されている。⁽²²⁾

以上のように、西堀川に関しては文献上明確に確認することはできなくとも、発掘調査によって一〇世紀後半以降のその氾濫の様子が明らかとなってきた。このような京内の西堀川の氾濫は、平安京の西郊を流れる葛野川の治水を行うことに對して、朝廷に無力感を感じさせることになったのではないだろうか。低湿地であることに加えての西堀川の氾濫は自然条件に對する人間の無力感を一層に痛感させたものと考えられ、そのために防葛野川所が廃止後に、防鴨河使のように復活することがなかった要因の一つであったと考えられる。これは右京が衰退を始めたと推測できる九世紀中頃と時期はずれものの、西堀川の氾濫が右京の衰退に拍車を掛けたことが推測できる。

おわりに

以上、平安京の変質、特に右京の衰亡について概観した。

桓武天皇によって万代の宮として建設された平安京であるが、その発展は都の西と東では大いに異なるものであった。つまり、平安京における左京への人の移動は、比較的早い時期からみられ、右京の衰亡には地理的条件が大いに関与していたと考えられることである。そうすると、やはり慶滋保胤のいう「天意」は大いに傾聴に値することである。

しかし、単に地理的条件であるとか「天意」という言葉で片付けることが可能かどうかは少々疑問が残る。例えば、右京にあたる太秦地域などは、古くから秦氏によって開発されていた地域であったと考えられることである。そうになると、単に地理的に湿地であり開発が遅れたと言いつけることはできず、地理的要因以外にも何らかの障害が存在した可能性があるが、現段階では不明であり後考を期すべき問題である。

註

(1) 『日本紀略』前編一三延暦一二年(七九三)正月甲午(一五日)条

甲午。遣_下大納言藤原小黒麿。左大弁紀古佐美等_一。相_{中山}背国葛野郡宇太村之地_上。為_二遷都_一也。

(2) 『続日本紀』卷卅八延暦三年(七八四)五月丙戌(一六日)条に「丙戌。勅遣_二中納言正三位藤原朝臣小黒麻呂。從三位藤原朝臣種繼。左大弁從三位佐伯宿祢今毛人。參議近衛中將正四位上紀朝臣船守。參議神祇伯從四位上大中臣朝臣子老。右衛士督正四位上坂上大忌寸荻田麻呂。衛門督從四位上佐伯宿祢久良麻呂。陰陽助外從五位下船連田口等於山背国_一。相_二訓郡長岡村之地_一。為_二遷都_一也」と遷都のための相地使が山背国の長岡村へ派遣され、同延暦三年(七八四)十一月戊申(一一日)条に「戊申。天皇移_二幸長岡宮_一」と桓武天皇が天皇が移幸することにより長岡京遷都が行われている。

(3) 『日本紀略』前編一三延暦一三年(七九四)一〇月丁卯(二八日)条

丁卯。(中略)遷_レ都。詔曰。云々。葛野(乃)大宮地者。山川(毛)麗(久)。四方国(乃)百姓(毛)参出来事(毛)便(之弓)云々。

(4) 『日本紀略』前篇一三延暦一三年(七九四)一月丁丑(八日)条

丁丑。詔。云々。山勢実合_二前聞_一。云々。此国山河襟带。自然作_レ城。因_二斯形勝_一。可_レ制_二新号_一。宜_下改_二山背国_一。為_二山城国_上。又子来之民。謳歌之輩。異口同辞。号曰_二平安京_一。又近江国滋賀郡古津者。先帝旧都。今接_二輦下_一。可_下追_二昔号_一改称_中大津_上。云々。

(5) 「池亭記」の本文及び読み下しについては大曾根章介・金原理・後藤昭雄校注『本朝文粹』(岩波新古典文学大系27、岩波書店、一九九二年)による。

(6) 解釈に関しては前掲註(5)書と村井康彦「慶滋保胤『池亭記』」(村井康彦編『雅 王朝の原像』〈京の歴史と文化1 長岡・平安時代〉、講談社、一九九四年)を参考とした。

(7) 『類聚三代格』卷第八「農桑事」所収昌泰四年(九〇二)四月五日太政官符

太政官符

応_レ聴_二耕_一作崇親院所領地五町一事

在_二山城国愛宕郡_一

右得_二彼院解_一傳。件地在_二四條大路南。六條坊門小路北。鴨河堤西。京極大路東_一。皆是依_二省符并公驗_一。売買人居之處也。去貞観二年創建_二件院_一之日。遷_二立彼屋舍_一。以為_下収_二養氏女_一之房室_上也。其中有_二大泉_一。宜_二於溉灌_一。仍加_二

墾闢_二聊殖_一梗稻_一充_二院中用_一。而太政官同十三年閏八月十四日下_二山城国_一符傳。鴨河堤東西除_二公田_一之外。諸家所_二耕_一作_二水陸田皆尽禁遏無_一復令_レ營。縱雖_二公田_一為_レ堤可_レ成_レ害者。猶復莫_レ令_二耕_一作_一者。由_二是頃年不_レ耕_一。既成_二荒地_一。今檢_下太政官去寛平八年四月十三日下_二同国_一符傳。可_レ聴_二耕_一作_二三條大路以北北辺以南水陸田廿二町百九十五步_一者。凡所_二以制_一堤東西水陸田者。為_下完_二堤防_一避_中水害_上也。而件院多在_二堤西_一。去_二堤五六段_一。池水饒多。地脈卑湿。不_レ可_レ成_二堤防之害_一也。望請。殊給_二公使_一先被_二実檢_一。若無_二堤害_一。准_二諸家并百姓等_一。復_レ旧被_レ聴_二耕_一作_一。謹請_二処分_一者。左大臣宣。奉_レ勅。依_レ請。

昌泰四年四月五日

(8) 中村修也『平安京の暮らしと行政』(日本史リブレット10、山川出版社、二〇〇一年)。

(9) 『延喜式』卷四十二東西市司式東廩条

東純廩 羅廩 糸廩 錦廩 幟頭廩 巾子廩 縫衣廩 帶廩 紵廩 布廩 苧廩 木綿廩 櫛廩 針廩 杏廩 菲廩 筆廩 墨廩 丹廩 珠廩 玉廩 藥廩 太刀廩 弓廩 箭廩 兵具廩 香廩 鞍橋廩 鞍褥廩 韃廩 鎧廩 障泥廩 鞆廩 鉄并金器廩 漆廩 油廩 染草廩 米廩 木器廩 麥廩 塩廩 醬廩 索餅廩 心太廩 海藻廩 菓子廩 蒜廩 干魚廩 馬廩 生魚廩 海菜廩

右五十一廩東市。

〔延喜式〕卷四十二東西市司式西廩条
絹廩 錦綾廩 糸廩 綿廩 紗羅廩 帛廩 幟頭廩 縫衣廩 裙廩 帶幡廩 紵廩 調布廩 麻廩 統麻廩 櫛廩 針廩 菲廩 雜染廩 蓑笠廩 染草廩 土器廩 油廩 米

麿 塩麿 未醬麿 索餅麿 糖麿 心太麿 海藻麿 菓子
麿 干魚麿 生魚麿 牛麿

右州三麿西市。

(11) 中村修也前掲註(8) 著書。

(12) 北村優季『平安京の災害史 都市の危機と再生』(歴史文化ライブラリー345、吉川弘文館、二〇一二年)。

(13) 北村優季前掲註(12) 著書。

(14) 『類聚三代格』卷一六「山野藪沢江河池沼事」所収貞観三年(八六一)三月十三日付太政官符

太政官符

応_下停_二防鴨河葛野河両使_一徐_中国司_上事

右件等河頃年分_二置使員_一令_レ加_二修防_一。而或数年積功一時招_レ損。或今日成_レ勞明朝致_レ破。空費_二公糧_一。動申_二流損_一。非常之因豈如_レ此哉。右大臣宣。奉_レ勅。為_レ政之道最隨_二權宜_一。今雖_レ有_二其使_一。所_レ成猶少。用途更多。自今以後。停_二止件使_一。永預_二国司_一令_レ修_二造之_一者。須_三守從四位下紀朝臣_二今守專一檢校勤存_二公平_一。既被_二委付_一。不_レ得_二怠慢_一。

貞観三年三月十三日

(15) 渡辺直彦「防鴨河使の研究」(同『日本古代官位制度の基礎的考察』増補版所収、吉川 弘文館、一九七二年)。

(16) 『日本紀略』前篇一二延暦十九年(八〇〇)十月己巳(四日)条

己巳。發_二山城。大和。河内。摂津。近江。丹波等諸国民一万人_一。以修_二葛野川隄_一。

(17) 『日本後紀』卷十四大同元年(八〇六)九月癸巳(四日)条
九月癸巳。勅。水之浸損。積_レ微為_レ害。属_二于小決_一。功在

平安京の変質 牧 伸行

二一簣_一。而无_二入監修_一。致_二此多壞_一。宜_下衛門衛士府專_上当_二左右京堤溝_一。勤加_中修補_上。

(18) 『日本紀略』前篇一三大同二年(八〇七)十一月庚子(一七日)条

庚子。令_レ修_二造大井_一。

(19) 『日本後紀』卷一七大同三年(八〇八)六月壬申(二一日)条

壬申。(中略)是日。令_下有品親王并諸司把笏者_上進_中役夫_上。各有_レ差。為_レ防_二葛野河_一也。

(20) 『日本後紀』卷一七大同三年(八〇八)七月辛丑(二一日)条

辛丑。(中略)是日。令_下内親王及命婦_上進_中堀_二葛野川_一役夫_上。各有_レ差。

(21) 永田信一「[検証]地下の都千二百年 発掘調査が明かす平安

京の構造」(村井康彦編『雅王朝の原像』(京の歴史と文化1 長岡・平安時代)、講談社、一九九四年)

(22) 中村修也前掲註(8) 著書。

(マキ ノブユキ 嘱託研究員)

